

# 腎臟護膜腫ノ一例ニ就テ

## Ueber einen Fall von Nierengumma.

Von Dr. M. GOTO.

[Aus chirurg. Klinik der kaiserl. Universität zu Kyoto. (Prof. Dr. K. Isobe)]

京都帝國大學醫學部外科學教室(磯部教授)

醫學士 後 藤 翠

腎臟微毒ハ臨床上之レニ遭遇スル事多シトセズ、殊ニ腎臟護膜腫ニアリテハ甚ダ稀有ノ事ニ屬スルガ故ニ、從來外科領域ニ於テハ稍看過セラレシ觀アリキ。然シナガラ腎臟ニ來ル微毒性變化ニ興味ヲ有スル事ハ、吾人外科醫ニアリテモ其診斷上治療上缺グ可カラザル事ニ屬シ、殊ニ後天性微毒ニヨル腎臟護膜腫ニアリテハ、他ノ眞性腫瘍又ハ結核性腎腫トノ鑑別診斷上困難ヲ感ズル場合少ナカラザルヲ以テ、茲ニ先人報告ノ跡ヲ辿リ、併セテ余ノ最近遭遇セシ例ヲ追加シ、諸家ノ垂救ヲ乞ハント欲ス。

抑モ腎臟微毒ハ、往時 Valsalva, Morgagni, Blackwell, Gregory 及ビ Wells 氏等ニヨリテ注意セラレ居リシモ、一八四〇年 Rayer ニヨリテ初メテ之レヲ臨床的ニ一ツノ疾患トシテ記載セラル、ニ至リシナリ。其後一八五八年 Virchow 次デ Beer, Traube, Lancereux, Wagner, Birch-Hirschfeld 其他ノ先人相次イデ業績ヲ發表シ、其知見ニ尠ナカラザル進歩ヲ來タシタリ。而シテ其頻度ハ Bamberger ニ從ヘバ剖檢腎臟炎二四三〇例中微毒ニ屬スベキモノ四九例、即チ二%ニシテ、Wagner ノ報告ヲ見ルニ九〇〇〇ノ剖檢屍體中腎微毒ハ六三例ニシテ、其内僅二例ハ護膜腫ナリキ。

Jones ハ微毒患者一八六例ヲ剖檢セシニ、内一二五例ハ腎臟ニ疾患ヲ有シ其内二例ニ於テ護膜腫ヲ發見セリ。又 Karvonen ニ從ヘバ、剖檢上微毒ニ歸スベキ腎臟ノ變化ハ剖檢總數ノ  $\frac{1}{4}$  乃至  $\frac{1}{2}$  %ニシテ、他種ノ腎臟疾患ニ對シ

テハ八對一ノ割合ナリキト。

翻テ腎臟護膜腫ノ外科的對稱ニ應用セシモノヲ舉グレバ、一八九二年 Israel ノ發表セシ二例ヲ以テ嚆矢トナス。次デ Powlby (1897) Greene (1898) Margulies (1903) Warren (1906) Hueter (1907) 其他二三氏其例ヲ報告シ、本邦ニ於テモ第十一回外科學會席上中山博士ノ報告アリ、次デ長谷川、松野兩氏各其手術例ヲ發表シ、大正拾參年杉村博士ハ其參例ヲ掲ゲ併セテ知見ノ補遺ヲ至セルモノアルノミ。

本例モ亦タ最近手術ニ依リテ得タルモノニシテ、近時驅微療法ノ進歩ニ從ヒ、腫瘍例ノ如キハ今後益々稀有タルベキモノト思意シ、余モ亦タ茲ニ此ノ實驗例ヲ報告セントスル次第ナリ。

元來腎臟微毒ノ其後期ニ屬スベキ病理解剖學的變化ハ、Thompson 氏ニ從ヘバ之レヲ慢性間質性腎臟炎、慢性實質性腎臟炎、澱粉樣變性腎及腎臟護膜腫ノ四種ニ大別ス。尙護膜性腎臟變化ニアリテモ、更ニ之レヲ(甲)限局性ノ所謂護膜結節ノ像ヲ呈スルモノト。(乙)、護膜性硬化ノ像ヲナシテ瀰蔓性ニ來ルモノトノ二種ニ別ツ、(甲)ハ結節ノ大サ一乃至二耗ヨリ數厘ナルヲ通常トスレドモ、時ニハ「ロシテニスボール」大(Thorn)又ハ腫ノ重量十七「オンス」(Powlby)ニ達セシ事アリ。Wagner, Cornil ニ依レバ其數二〇乃至六〇ニ及ビシ事アリテ、皮質、髓質共ニ生ジ、稀ニ乳頭ニ生ズ。Trichow ノ記スル所ニヨレバ、其周緣ハ硬固緻密ナル結締組織ヨリナリ、中心ニ行クニ從ヒ、灰白ニシテ硬固、堅韌、彈力性ニ富ムアリ、或ハ帶黃白又ハ黃色髓樣ナルアリ、或ハ乾燥、脆弱、乾酪樣ナルモノ存シ、時ニ泥狀或ハ軟化セルモノアリト云ヘリ。

(乙)ニアリテハ所謂明劃ナル限界ナクシテ腎ヲ犯シ、其内ニ無數ノ小硬化竈ヲ有スルモノニシテ、瀰蔓性萎縮性硬化ノ像ヲ呈シ、腎小體ノ硝子樣變性、及細尿管ノ萎縮ヲ起シ、細尿管上皮ノ脂肪變性、及血管ノ内膜變化、殊ニ其完全ナル閉塞ヲ伴フ事アルモノトス。

又 Hueter 氏ハ護膜結節少數ナル時ハ、他ノ腎組織ハ變化ナキ事アレドモ、其數多キ時ハ、他ノ組織モ亦タ炎症ヲ起

シ、萎縮スト云ヘリ。尙腎臟護謨腫ハ兩側腎ヲ同時ニ犯スベキモノナルヤ、又ハ片側ニ止マルモノナルヤニ就テハ、意見區々ニシテ Israel, Greene, Campbell 其他多數ノ人ハ片側ニ組シ、Hueter ハ兩側ヲ主張スルモ兩側ヲ犯サレタル Huber ノ一例ノ外ハ、多クハ片側腫瘍トシテ現出スルモノノ如シ。

### 實 驗 例

患者 平〇武〇 五拾歳

血族史、一叔父ハ食道癌ニテ死セリト、患者ハ八人ノ子ヲ有シ、内三人ハ先妻ニヨリテ生ジ、五人ハ現在ノ妻ニヨリテ生ズ。先妻ノ子一人ハ肋膜炎ニ罹リシ事アリ、後妻ノ第一子ハ七ヶ月ニテ早産シ、第三子ハ三歳ノ時腦膜炎ニテ死シ、第四子ハ生後十五日位ニシテ臍部ヨリ出血ノ爲メ斃レ、第五子ノ際ニハ惡性惡阻ノ爲メニ三ヶ月ニシテ人工流産術ヲ施サレタリ。

既往症、患者ハ生來健ナリシカド二十歳ノ頃脚氣ヲ患ヒシ事アリ。又大正元年ニ右側副睪丸部ニ無痛性ノ瘤腫ヲ得、結核性副睪丸炎ノ診斷ノ元ニ、同部ニ手術ヲ受ケタリ。花柳病ハ之レヲ否定ス。

現在症、大正九年正月感冒ニ罹リ、其後引續キ熱發ヲ來タシ、其熱型ハ一週又ハ數週ノ間隔ヲ置キテ、約一週間位ノ間ニ段々上昇シ、最高三九度乃至四〇度ニ達シ、二三日間稽留シテ後急ニ下熱スルヲ常トセリト。當時胸部及腹部ニハ何等異常ヲ感セザリシト。斯カル發熱ハ大正十三年七月頃マデ引續キ連續シ、其後ハ少シモ發熱スル事ナキニ至レリト。コノ下熱ニ先キ立ツ事約二ヶ月、即チ同年五月頃、偶然醫師ニヨリ右側季肋膜部ニ約手拳大ノ堅キ腫瘍アルヲ發見セラル。此腫瘍ハ無痛性ニシテ、同年七月頃マデハ段々大サヲ増シ、患者自ラ之レヲ觸知シ得ル様ナリシガ、其後ハ幾分縮少セシ様感ズト。下熱後ハ身體全ク正常ニ復シ、何等ノ違和、倦怠等モナク、又當初ヨリ盜汗腹痛、腹鳴等ヲ訴ヘシ事ナク、尙尿ハ清澄ニシテ放尿異常、血尿等モナシト。全身検査、體格強、榮養良、皮膚異常ナク、筋肉脂肪組織ノ發育共ニ良、食

慾可ニシテ脈搏尋常、呼吸平靜ナリ。心臓ハ大サ尋常ニシテ、心音低調ナレドモ、各音清ニシテ雜音ヲ交ヘズ。肺臟ハ打診上變化ナク、聽診上又何等ノ異常ヲ認メズ。頭部、顔面、四肢ニ著變ナク。右側睪丸ハ切除術ヲ受ケテ無ク、左側睪丸副睪丸尋常。頸部、其他ノ淋巴腺腫脹ナシ。

腹部ハ一般ニ膨隆シ、其右側ニハ多少靜脈ノ怒張セルヲ見ルモ、限局セル發赤等ハ認メラレズ、且又腹水ノ諸徵ヲ發見セズ。肝臟、脾臟及ビ左腎ヲ觸ル、ト能ハザレドモ、右側腎臟ハ明ニ觸知シ得テ、呼吸ト共ニ動キ、呼吸時之レヲ固定シ得。而シテ其境界ハ可ナリ明瞭ニシテ、硬度ハ普通ヨリモ少シク硬ク、表面不整ナラズシテ、波動ノ感ナク、又壓痛ヲ訴ヘズ、腫瘍ハ右側上力ヘ向ツテ可ナリ長ク之レヲ推移セシムル事ヲ得ルノミナラズ、左側側臥ノ位置ニテハ自然左下方ヘ轉位ス。

ワツセルマン氏血清反應ハ強陽性ナリ。  
膀胱検査、膀胱ノ内容量ハ二〇〇cc以上ニシテ、形尋常、粘膜及輸尿管口ニ變化ナシ。

更ニ兩側輸尿管「カテーテル」送込法ヲ試ミ、左側輸尿管内ヘ「カテーテル」ヲ容易ニ一〇cm以上ニ挿入シ得タレドモ、右側ニ於テハ約一cm程挿入セシ部ニ於テ抵抗ヲ感ジ更ニ深送シ得ザリシノミナラズ、尿線ノ放出モ左側ニ比シテ遙ニ緩徐ナリキ。次ニ二%「インヂゴカルミン」液六〇ccヲ筋肉内ヘ注射シテ腎機能検査ヲ行ヒシニ、左腎ハ七分後、右腎ハ九分後ニ於テ靑藍色ニ染メル尿ノ現出セルヲ見タリ。

左右分離尿ノ所見左ノ如シ。

| 外見   | 左腎尿   |       | 右腎尿   |       |
|------|-------|-------|-------|-------|
|      | 黄色清澄  | 酸性    | 渾濁    | 酸性    |
| 蛋白反應 | +     | +     | ++    | ++    |
| 赤血球  | 數個ヲ見ル | 數個ヲ見ル | 數個ヲ見ル | 數個ヲ見ル |
| 白血球  | 數個ヲ見ル | 數個ヲ見ル | 數個ヲ見ル | 數個ヲ見ル |
| 腎細胞  | 少數    | 極少數   | 極少數   | 極少數   |
| 扁平細胞 | (-)   | 豐多    | (-)   | 豐多    |
| 有尾細胞 | 可ナリ存  | 少數    | (-)   | 少數    |
| 圓嚢   | (-)   | (-)   | (-)   | (-)   |

「フエノール、ズルフオンフタレン」腎機能検査、フエノール、ズルフオンフタレン」〇〇〇六五ヲ筋肉内へ注射セ

シニ、排泄尿中へハ十分後ヨリ現出シ始メ、二時間内ニ二七・五%、次ノ一時間内ニ一七%、更ニ次ノ一時間ニ九%、合計三時間内ニ五三・五%ヲ尿中ニ排泄セリ。

尙横田氏法ニ從ツテ腎周圍、盆氣照射法ヲ試ミシニ、左側健腎ニテ

ハ送氣容易ニシテ明瞭ナル腎臟ノ輪廓ヲ認ムルコトヲ得タルニ反シ、右側ニテハ送氣困難ニシテ腎臟ハ單ニ不規則ナル放射狀ノ影トシテ現ハレ、盆氣モ亦極メテ不規則ナリキ。(日本外科資函第二卷、第二號、一一二頁及ビ附圖第九參照)。

手術所見「ノボカイン」局所麻醉ノ下ニ、ベルグマン氏腰部斜切法ヲ行フ。

腎周圍脂肪組織ハ豊富ナリシモ、腎臟周圍炎症癒着ノ爲メニ其轉脫ニ甚ダ困

難ヲ覺エシヲ以テ、之レヲ固有被膜下ニ剝離剔出セリ。腎其物ハ大サヲ減ジ、硬度一様ナラズ、表面ハ凹凸不整ニシテ突出部ハ他ヨリ硬シ。腎莖部ハ短縮シ、周圍組織トノ癒着甚ダシカリキ。

手術後ノ經過良好ニシテ術後七十三日ニシテ全治退院セリ。尿量ハ一日八〇

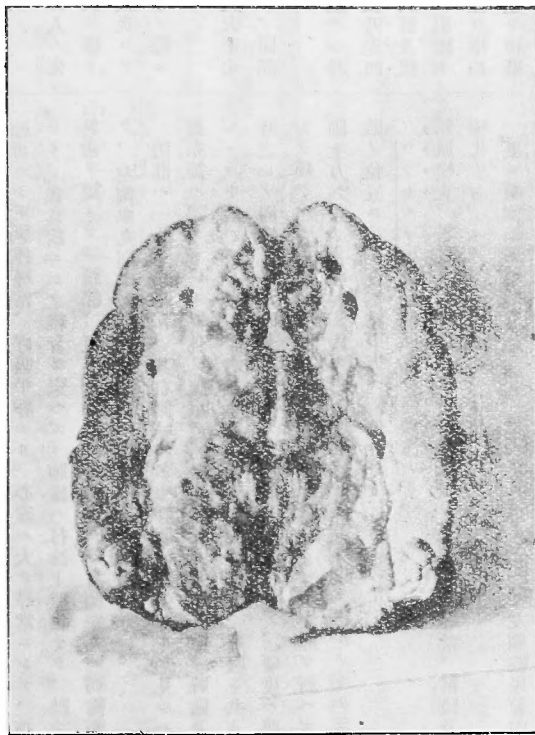


圖 面 割

〇乃至一三〇〇蛭ヲ算シ蛋白ハ間モナク陰性トナリ、特種沈渣所見モ消失セリ。其間ニ榮養益良好トナリ、體重モ亦著シク加増セリ。但シ數回ノ「サビオールナトリウム」ノ反復注射ニモ係ラズ、ワ氏反應未ダ陽性ナルヲ以テ引續キ、驅微療法ヲ行ヒツ、アリ。

剔出腎臟ノ肉眼的所見

縱八・〇浬、横五・五浬、厚サ三・六浬、重量約八五・〇瓦ニシテ、腎實質ノ殆

ンド三分ノ二ハ腫瘍化シ居レリ。腫瘍ハ主トシテ腎門部ノ周圍、内側下部ニ存シ、外側上方ハ比較的犯サル、事少ナク、表面ニ數多ノ瘤起ヲ形成シ、且ツ所々ニ表在性小出血點ヲ示ス。剖面ヨリ見ルニ小豆大ヨリ鳩卵大ノ約二十數個ノ結節アリ、其形圓クシテ境界割合ニ判然タル所、及ビ數個ノ結節互ニ相融合シテ地圖狀ヲナセル所ノリ、何レモ黃色ヲ帶ビ、軟化、出血竈ヲ認メズ。

斯カル腫瘍ハ主トシテ腎盂内ヘ向ツテ發育隆起シ、爲メニ腎盂甚ダシク縮小セリ。結節以外ノ腎組織モ亦タ萎縮シ、灰白色ヲ帶ビ、皮質、錐狀體共ニ狹小ナレリ。剔出腎臟ノ組織學的所見

先ツ腫瘍及其周縁部ヲ檢スルニ、腫瘍組織ハ其中心部ニ於テ崩壞シ、「エオジン」ニテ赤染スル無定形ノ物質ニ變化セリ、但シ此竈ヲ注視スレバ壞死セル絲絨體及ビ細尿管ノ殘骸ガ所々ニ陰影トシテ發見セシムルモノアリ。其周圍ハ増殖セル結締組織ニテ繞圍セラレ、其間ニ數多ノ圓形細胞浸潤アリ。壞死部ニ隣接セル部分ノ細胞ハ融解ヲ始メ、核崩壞ノ像ヲ示ス。壞死部ヲ遠ザカルニ從ヒ、増殖結締組織内ニ纖維性ニ荒廢セル絲絨體及ビ強ク變性セル直細尿管ノ斷片ガ粗ラニ散在セルヲ認メシム。

圓形細胞ハ主トシテ淋巴球ニシテ、之レニ分葉核ヲ有スル白血球及「プラズマ」細胞ヲ交エ、巨大細胞ハ之ヲ發見セズ。

次ニ腫瘍ヨリ遠リタル部分ノ腎組織ヲ檢スルニ間質ハ一般ニ結締組織増殖シ、圓形細胞ノ浸潤ヲ伴フ。此浸潤ハ血管殊ニ絲絨體ノ近傍ニ多シ。絲絨體ハ其排列不整ニシテ一般ニ縮小シ、全ク硝子樣變性ヲ來タセルモノアリ、或ハ染色不良ニシテ強度ノ退行性變性ヲ示セルモノアリ、ボーマン氏囊ハ總テ著シク肥厚セリ。

以上ノ如ク、本實驗例ニ於ケル腎臟ノ變化ハ、肉眼的ニモ、檢鏡的ニモ、護膜腫ノ像ヲ呈シ、ワ氏血清反應又陽性ナリ

細尿管ハ増殖セル結締組織ノ爲メニ、其數ヲ減ジ、一般ニ萎縮シテ細小トナリ居レドモ、中ニハ間隙稍廣ク、細胞ハ扁平トナリ、腔内ニ赤染セル同質性ノ凝塊ヲ入ル、モノアリ。又或ル部分ニ於テハ比較的犯サレザル曲細尿管ノ嶋嶼狀ヲナシテ殘留セルモノアルモ、其周圍ニハ尙少許ノ充血及ビ細胞浸潤ヲ伴ヘ



圖 面 表

リ。血管ハ一般ニ其壁肥厚シ、殊ニ内膜不規則ニ增生シ、内容既ニ閉塞セルモノアリ。ワイケルト氏彈力纖維染色法ニヨルニ、其彈力纖維ハ一般ニ不整ニシテ分裂セリ、殊ニ壞死樣組織内ニ於テハ血管ノ映像既ニ消失シ、只遺存セル彈力纖維ニヨリテ僅ニ血管存在ノ舊跡ヲ思ハシムルニ止マル所アリ。

シモノナリ。而シテ臨床諸徴ニ關シ從來報告セラレシモノト本例ノモノトヲ對比センニ、腎腫ハ多クノ場合頗ル大ナルモノヲ證明シ、其表面凸凹不整ニシテ、爲メニ惡性腫瘍ヲ疑ハシメ、或ハ結核腎ヲ思ハシムルモノナルモ時トシテハ、Wolzノ例ノ如ク腎周圍炎ノ症狀ヲ呈スル事アリ。本例ニ於テモ亦腎其物ハ腫大セズシテ寧ロ縮小ノ觀アルモ、腎周圍ノ組織中ニ於ケル微毒性浸潤ノ爲メニ、外部ヨリ明ニ大ナル腫瘍トシテ觸知セラレシモノナリ。

尙患側ノ疼痛ニ關シテハ、Chevassuノ例ノ如ク疼痛甚ダシク麻醉劑ヲ用ヒザル可カラザルニ至ル場合モアレド、又報告セル例ノ如ク全く無痛ナル事アリ。本例モ亦局所ニ何等ノ疼痛ナク、偶然醫師ニヨリ發見セラレシモノナリ、然シ多クハ患側ニ牽引様疼痛又ハ鈍痛ヲ訴ルモノノ如シ。

全身症狀トシテハ、何等異常ヲ訴ヘザル事アリ、又惡寒熱發羸瘦皮膚蒼白、惡液質等ヲ來ス事アリ。

本例ニ於テハ先ニ記述セシガ如ク、長期ニ互リ再歸性ノ發熱ヲ來タセリ。當時直接診查セザリシヲ以テ果シテ熱原ノ何處ニ存セシカヲ知ル事難シト雖モ、兎ニ角實際診療セシ各醫ノ診斷區々タリシト、入院當時ノ所見ニハ肺ニ何等ノ病變ノ痕跡モナク、殊ニ手術時高度ノ腎臟周圍炎ノ存在ヲ確メ得タル事等ヲ綜合シテ考フルニ、發熱ト本病トノ間ニ何等カノ關係アリシモノト想像セラル。

次ニ尿ノ變化ニ至リテハ、腎臟ニ於ケル護謨性變化ノ程度ノ如何ニヨリテ區々タリト雖モ、微量ノ蛋白、少數ノ赤血球、白血球及圓壻ヲ有スルヲ常トス。但シ時トシテハ尿ニ全く異常ナキ事、或ハ蛋白ノ痕跡ノミヲ認ムル事、又ハ朝尿ニ蛋白ナクシテ午後ニ限リ尿中ニ蛋白ノ出現スル事アリ (Mellor)。又時トシテハ護謨腫ガ腎盂中ニ自壞シテ突然尿中ニ血液、頽敗物、脂肪、上皮細胞等ヨリナレル濃キ黑色ノ塊ヲ出シ、然モ數日後ニハ無蛋白ノ平常尿ニ歸ルガ如キ場合アリ (Wolander)。本例ニ於テハ、蛋白反應陽性ニシテ、尿中少數ノ赤血球及白血球ヲ證明シ。又膀胱鏡検査ノ所見陰性ナリシモ、右側輸尿管「カテーテル」ハ其輸尿管口ヨリ僅カ一糲許リ上方へ挿入シ得タルノミニシテ更ニ深送シ得ズ、之レヲ手術時ノ所見ニ徴スルニ恐ラクハ微毒性浸潤ガ輸尿管ノ餘程下部マデ進行シ居リシモノト思ハル。

尙腎機能検査ニ於テモ患側ノ排泄作用ハ著シク減退セル事ヲ示セリ。(大正十四年四月二十五日脱稿)

# LITERATUR.

- (1) **Bierbach**, Report of a case of gumma of the right kidney. The Journ. of Urol. Vol. 5. 1921, p. 139.
- (2) **Bowlby, A. A.**, Gummatous disease of the kidney causing a large renal tumor. Zit. in Thompson, L.
- (3) **Campbell, R. R.**, The diagnosis of syphiloma of kidneys. The Journ. of Americ. Med. Assoc. Vol. 44. 1905, p. 1346.
- (4) **Chevassu, M.**, Syphilome du rein gauche. Bull. et mém. de la soc. de chir. de Paris 1914, p. 717. Ref. in Centralbl. f. Chir. 1914, S. 1581.
- (5) **Greene, R. H.**, Syphilis of the kidneys. Journ. of cutan. and genito-urin. diseases. Vol. 16. 1898, p. 12.
- (6) **Horteloup**, Note sur l'albaminurie syphilitique. Ann. de dermat. et syph. Vol. 7. 1886, No. 10. Ref. in Centralbl. f. Chir. 1887, S. 131.
- (7) **Huber, K.**, Syphilitische Gummata in den Nieren. Archiv d. Heilkunde. Leipzig. Bd. XIX, 1878, S. 425.
- (8) **Hueter**, Ueber Gummibildung in den Nieren. Münch. med. Wochenschr. 1907, S. 2261.
- (9) **Israel, J.**, Ueber die Beziehung der Syphilis zur Nierenchirurgie. Deut. med. Wochenschr. 1892, S. 5.
- (10) **Karvonen, J. J.**, Die Nierensyphilis. Berlin. 1901, Karger. (aus Literaturen von Wintanitz).
- (11) **Margulies, M. V.**, Ueber die Beziehung d. Syphilis zur Nierenchirurgie. Deut. med. Wochenschr. 1903, S. 825.
- (12) **Munk, F.**, Klinische Diagnostik degenerativer Nierenveränderungen, insbesondere der Syphilisniere. Berlin. kl. Wochenschr. 1913, S. 1416.
- (13) **Seiler**, Syphilom d. Niere. Deutsches Arch. f. kl. Med. Bd. XXIX, 1881, S. 606.
- (14) **Tommasoli, P.**, Nierensyphilis. Arch. ital. di clin. med. 1888, Juni 30. Ref. in Centralbl. f. Chir. 1888, S. 948.
- (15) **Thompson, L.**, Syphilis of the kidney. The Journ. of the Americ. Med. Assoc. Vol. 75. 1920, p. 19.
- (16) **Warren, R.**, Demonstration of a specimen of gumma of the left kidney. The Lancet. Vol. 2. 1906, p. 1594.
- (17) **Welander, E.**, Klinische Studien über Nierenaffectio bei Syphilis. Arch. f. Derm. u. Syph. Bd. XXXVII, 1896, S. 91-126. u. 323-359.
- (18) **Welz, A.**, Nierensyphilis. Deut. med. Wochenschr. 1913, S. 1201.
- (19) **Winternitz, R.**, Syphilis der Nieren. Finger-Jadassohn's Handbuch der Geschlechtskrankheiten. Bd. III, 2. Teil. 1916, S. 1719.
- (20) **長谷川寛治**, 腎臟護膜腫ノ一例, 日本外科学會雑誌, 第十三回, 大正元年, 第七四五頁.
- (21) **高木繁**, 泌尿生殖器ノ梅毒ニ就テ, 九州帝國大學醫科大學雑誌部發行, 梅毒, 第二八五頁.
- (22) **中山森彦**, 腎臟梅毒ニ就テ, 日本外科学會雑誌, 第十一回, 明治四十三年, 第二六一頁.
- (23) **松野朝造**, 腎臟護膜腫ノ一例, 北海道醫學會雑誌, 第一號, 大正十二年, 第六八頁.
- (23) **杉村七太郎**, 腎臟護膜腫ノ知見補遺, 日本外科学會雑誌, 第二十四回, 大正十三年, 第一四四一頁.